

# ぼつけもん

片山 二郎

昨年十一月初旬、鹿児島県霧島のリハビリ病院に入院期間中、近場のえびの高原に一泊した。夕食の地鶏鍋に舌鼓を打ち、少々の酒を愉しんだ。低カロリーと減塩の病院食に馴染んでいた胃袋には、突然の酒池肉林である。酒は強い方だと自認していたが、焼酎一合にも満たない量で酔いが回ってきた。

脳卒中の後遺症のため、バランス機能を失っている身体に酔いのフラ付きが加わり、地に足が着かない不可思議な感覚であった。酔いの心地良さを実感しながら、杖と廊下の手摺に介助されて部屋に戻った。勿論その夜は爆睡である。

翌日朝のテレビには、高原の紅葉が映し出されていた。「紅葉を観たい」願望が昂っていた。山道散策コースの様子を訊いてみた。

「その身体で、無理では…」

意気を削がれる反応だった。チェックアウト後外に出ると、傍らのもみじ楓は見事な紅葉を競っていた。周辺を散策し売店に立ち寄った。二日後十四歳の誕生日を迎える孫娘に、地元名産の菓子や名入りのストラップを買いメッセージを入れて送った。

昼食の折、隣のテーブルに年配熟女三人衆、リピーターらしく甌（こしき）岳や韓（から）国岳の景観や途中の見所など、ケラケラ笑いながら賑々しく話していた。私の脳裡には、山裾と池に映る紅葉がチラついていた。

散策マップをポケットから取り出した。「やはり無理かな」と「少しくらいなら大丈夫だろう」が交錯した。取りあえずスタート地点に向った。案内板には距離、目安の所要時間が書かれてあった。最初のポイントの展望台までは四百m弱、所要時間十五分程度。

「この身体では倍は掛るだろうな」と思いつつ、横にいた熟年夫婦の様子を訊いてみた。整備されていると聞いて決行を即断した。しばらく進むと、赤子の頭大から拳位の石がやたら多くなってきた。杖を突く位置が肝要となる。大き目の石に照準

を合わせるのだが、的を外すと石がグラつき、足を踏み外すリスクも高くなる。歩む速度は更に遅くなった。平日にも拘らず人の数は多い。手に杖を持ったため、狭い山道では右端に寄った。

すれ違う人は互いに「こんにちは」

追い抜いて行く人は「お先に」

道行く人の挨拶が、爽やかな余韻を残す。立ち止まり声を掛けてくれる人もいた。「お疲れさま」「大丈夫ですか」

展望台に着いたのは、スタートしてから三十分を過ぎていた。丸太組の見晴らし台に上ると、少し霞んでいるが眼前に天と地のパノラマが広がる。足の痛みや常態化している息苦しい緊迫感も普段よりむしろ軽い。次は白紫池から二湖展望台、距離約一・五km、所要時間約四十分程度。自身の足では一時間少々だろうか、時計は午後一時を回っていた。

赤松の樹林を縫うように続く山道は、ゴロ石で覆われている。健常であれば何でもない踏み石だが、この身体には難行苦行の修練場である。途中には小さな谷もあり杖は使えず、四つん這いの姿勢。

「大丈夫ですか、本当に大丈夫ですか…」

何人もの人から声が掛かった。

「大丈夫です、リハビリの一環です」

強がりを行い作り笑いで応えたが、内心自責と後悔の念が過ぎっていた。

山道は赤松の樹林の中にあるがよく手入され明るい。途中目通り二十cm程の沙羅樹（シヤラノキ）があった。別名夏ツバキ、樹皮が捲れたように変色している。不思議なことに、周辺のみならず辿って来た道にも見当らなかつた。自生でないのは明白だが、とはいえこの場所に数本のみ植樹するのも合点がいかぬ。何か由来があるのだろうか。

三十数年前千葉木更津の我が家新築の折、狭い庭の半日蔭の場所に沙羅樹を植えた。目通り七〜八cm位だが、夏に一重の椿に似た白い花が咲く。憐れさを漂わせながら、少し黄色味を帯び数日後突然ポロっと墮ちた。儂さを象徴するような花である。我が家の沙羅樹は三年後儂くも枯れた。平家物語の「沙羅双樹の花の色…」の句は、余りにも有名である。

急な階段状や樹の根っこが絡んだ坂道、だらだら坂。一時間も経った頃だろうか、

我が身には最大の難所に出た。二、三程の急な斜面の下りと上り、谷には細い川筋がある。健常者でさえ張り出した樹の根や石を掴んで渡っている。四つん這いで降りていた時、先行く人が戻って来て後ろから支えてくれた。

「助かりました、ありがとうございます」

嬉しかった、胸に熱いものが走った。丁重に礼を言い、再び歩を進めた。少々遅れ気味、歩調を速めると少し汗ばんできた。ようやく白紫池の畔に着いたが、そこには想い描いていた紅葉の彩りは乏しかった。時間的にも余裕がないため二湖展望台は諦めた。

「今から引き返せば、最終バスに間に合う」

その一方で

「急げば、コースを回れるのでは」

心中のせめぎ合い、さてどうしたものか。

人生塞翁が馬、素敵な出会いがそこにあった。後から来た夫婦連れが声を掛けてくれた。

「こんにちは、大丈夫ですか」

杖に寄り掛かり、思案気な私の様子を見て気に懸かったそうだ。手短かに状況を話した。

「その身体でよく来ましたねー、折角ここまで来たのに引き返すのはもったいない。往くも戻るも大差ないですよ」そして

「一緒に行きましょう」と、言ってくれた。

日置市に住むAさん夫婦、見ず知らずの私に同道し、しかも不動池に駐車してある車への同乗を勧めてくれた。思わず「ラッキー」と叫んだ。バスの時間を気にしなくてもよい、それだけでも気が楽になった。

比較的起伏は少ないが、相変わずゴロ石の連続である。私の前に奥さんが、ご主人は足下が悪く不測の事態に備えて後ろに付いてくれた。杖を突きに歩く速度は普通の人の半分。Aさん夫婦は、交通整理も担ってくれた。

赤松の樹林に檜・楓等の広葉樹が散在し、時折孤高の杉が姿を見せる。フィトンチッド効果のほどは定かではないが、火照った身体に爽やかな冷気と、Aさん夫婦の心の温もりが伝わってくる。清々しい時を刻んでいった。

発症後の経緯、病の特徴、千葉から鹿児島へ来た事情、ライフワーク等話しが弾

んだ。Aさんは私より二歳年上、夫婦の中間が私の年齢だ。歳も近いせい話題は拡がった。睦まじい二人を見ていると、「夫唱婦随」いや「婦唱夫随」を目の当たりにした思いがした。

三〇分余り、杉の巨木に出会うとそこが六観音御池である。広葉樹や樅・赤松の針葉樹が混在する。イメージした紅葉とはかなり差があったが、自然が織りなす景観は心を打つ。

疲れや痛みはほとんど感じなかった。Aさんは私が我慢しているのではと気遣ってくれたが、重ねて否定すると「本当に大丈夫ですか、リハビリ中ですよ」と、訝っていた。

そこから不動池までは一・五km。私の足では一時間。前に奥さん後ろにご主人、中の私は導かれ後押しされ快調に進む。陽が傾きはじめ冷気が忍び寄ってきたが、汗ばんできた身体には心地良い。

早目に着いた、放映されていた不動池である。紅葉は期待値に達しないが、歩いてきた光景の中では最も紅葉が進んでいる。放映されていたロケーションは、確かにそこにあった。眼下に池を臨み、散在する赤や黄が水面に映る光景を眺めつつしばらく佇んでいた。新燃岳噴火や周辺の山並み、見所などAさんの話を聞きながら駐車場へ向った。

車に着くと温かいお茶。一口二口、汗を掻いた後少々寒気を感じていた身体に温かさが沁み透った。飲み干すと

「よかったら、どうぞ」と、飴を勧められた。舌で転がすと甘みが口の中一杯に拡がった。美味しかった。Aさん夫婦との素適な出会いが凝縮していた。Aさんは自宅までの帰路、かなり遠回りになるにも拘らず病院まで送ってくれた。

快調を支えてくれたのは、もう一つの要因があった。主治医のドクターYは、可能性を引き出すその一つとしてスパッツタイトを薦めてくれた。効果てき面、アスリート着用の理由が納得できた。失われた神経細胞の補完として、効果的に作用したようだ。しかし、よくぞあれだけの行動が果たせたものだ。自らの潜在能力を再発見した思いだった。

ドクターYは病室にやってきて、同じ目線で

「どうでしたか、えびの高原は。体調は」

ハイタッチを交わした。ドクターYの少女のような笑顔が眩しかった。療法士、



看護師そして患者仲間等多くの人達との関わりの中で、九週間の入院生活を終えた。病の本質は変らぬが、個別の改善は実感できた。この病に方程式や特効薬はない。先は見えぬがその先を信じよう。

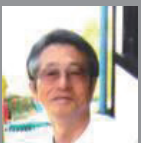
障害を持ち不自由な身を耐えている人は、社会の谷間でひっそり暮らしている。病院や施設の経営体質や、足切りと称される医療制度の狭間でもがいている。世間の目はそれほど寛容でないことは、身を以て体験してきた。それでもひたすら、ひたむきに歩み続ける、それ以外に道はない。

「諦めないで」

その言葉が、背中を押してくれる。

先日Aさんから手紙が届いた。私のことを「ぼっけもん」と、書かれてあった。無鉄砲や大胆に通ずるらしいが、思わずニンマリ。改めてあの日の行動が思い起こされた。

中にプロ顔負けの写真が同封されてあった。《夕陽の桜島》噴火を意識したが、凄みを感じるほどの迫力である。数枚の写真、同じ対象でも見方や背景、環境等の条件により、こうも表情が変わるものか。リハビリにも何となく相通じるように思えた。



片山 二郎

一九四三年 大阪生まれ

二〇〇五年 退職後、千葉県鴨川の山里にてアウトドアライフに没頭

二〇一〇年 脳卒中発症、以降闘病リハビリ生活

現在 千葉県木更津市在住